

占いの社会心理学に関する研究

渡邊 涼花

本研究では、現代日本で広く受容されている占いを対象に、社会心理学の観点から分析し、占いが人々の意識や行動にどのように関わっているのか、その役割と意味を整理して明らかにすることを目的とする。

近年は、SNS や動画配信サービスの普及を背景に、占いは限られた場で受けるものから、日常生活の中で手軽に接するものへと変化している。一方で、占いがなぜこれほど支持され続けているのかについては、現時点で十分に整理されていない。

本論文では、占いが受け入れられる要因を整理するため、将来に対する不安と自己理解への欲求に着目し、まずその背景から検討を開始した。バーナム効果や予言の自己成就などの社会心理学の概念を用いて、占いが「当たるかどうか」だけで判断されているのではなく、不安の軽減や自身の選択の正当化に向けた手がかりとして受け取られている点を整理した。

次に、雑誌、テレビ、SNS など複数の媒体に見られる占いの表現を比較し、媒体ごとの傾向と特徴を整理したうえで考察を行った。特に SNS 上の占いは、短い文章や画像で内容が直感的に伝わりやすく、他者と共有される過程で共感が生じやすい傾向が見られます。このため、本人にとって「当たっている」と感じる印象が強まりやすいことが、特徴として挙げられた。

占いが女性向けコンテンツとして定着してきた経緯を整理した上で、ジェンダー意識との関連についても検討を行った。占いは娯楽として受け取られる場面が多い一方で、それだけにとどまらず、本人が自分の考え方や置かれた状況を見直すきっかけとなり、感情を整理する助けにもなっている。

こうした点から、占いは日常の中で行われる文化的な実践の一つとして位置づけられる。

最後に、以上の考察から、占いは現代社会において個人の不安や迷いに一定の支えを与える一方で、社会構造やジェンダー規範の影響を受け、またそれらを再生産する側面も持つ現象であるといえる。